

# 茶工場稼働期間の拡大を可能とする品種および保管技術の開発 病害虫に強い新品種「かなえまる」と茶葉の低温 保管システム



イメージ

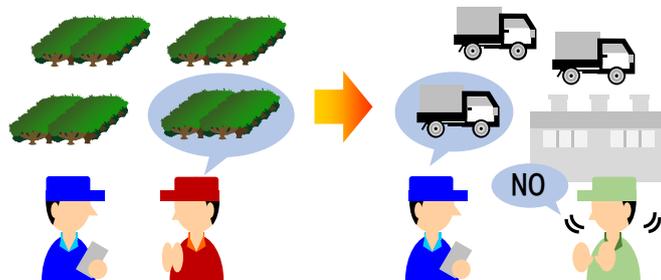
病害虫に強い中生の新品種「**かなえまる**」と、**茶葉の低温保管システム**を開発しました。

新品種により収穫時期をずらすことに加え、低温保管システムによる生葉の品質保存を可能とすることにより、**生産性の向上が期待**されます。

## 研究背景

近年、茶の生産はコストの削減を目的とした機械化や、後継者不足に伴う経営面積の拡大が進められています。一方で、普通煎茶は収穫から加工までの時間が空くと著しく品質が低下するため、速やかな処理が必要ですが、製茶工場の受け入れ量には限界があること等が課題でした。

そこで、収穫時期の労働集中の緩和および生産性の向上を可能とする新たな品種・技術の開発に取り組みました。



栽培面積が増えても、茶工場で受け入れができれば収穫適期を逃し、収益の増加は見込めない

研究代表機関

農研機構

プロジェクト名

茶葉の低温保管システムの開発と作期拡大を可能とする新品種の育成

研究期間

平成30年度～  
令和4年度

共同研究機関：鹿児島県農業開発総合センター、静岡県農林技術研究所、滋賀県農業技術振興センター、カワサキ機工株式会社、鹿児島堀口製茶有限会社、菊永茶生産組合、勝間田開拓茶農業協同組合、柏木茶園

## 主要な成果

1

病害虫に強い中生の新品種  
「かなえまる」の開発

被覆栽培に適しており、収穫時期を2～3日遅らせることが可能。それにより、**茶工場の生葉搬入量の平準化**に繋がり、**生葉処理量の14%増加**が実現。また、病害虫に対する抵抗性を有するため、**減農薬・有機栽培の拡大**が期待



無農薬栽培の実証試験地における  
「かなえまる」

農研機構 果樹茶業研究部門

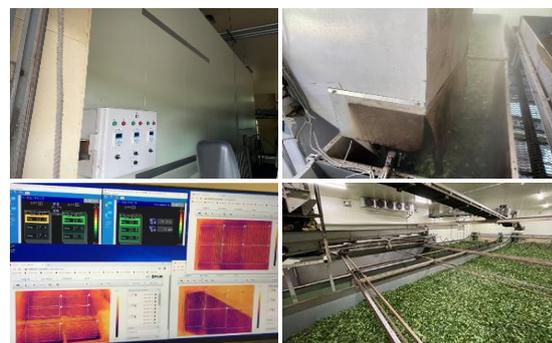
<https://www.naro.go.jp/laboratory/nifits/index.html>



2

長期間の品質維持を可能とする閉鎖型低温保管システムを開発

生葉1kgあたり0.3～1円のランニングコストで稼働日数13%、生葉処理量12%、売上15%増加可能



左上：低温保管庫 右上：ミスト冷却器  
左下：制御パネル 右下：コンテナ内部

鹿児島県農業開発総合センター 茶業部

<http://www.pref.kagoshima.jp/ag11/section/tya.html>



3

香り緑茶※生産に適した開放型低温保管システムを開発

従来の収穫適期の前後および雨天時においても製造が可能になることで、**生葉処理量を12%増加可能**（最大71.4tの処理が可能）



左：増設した送風機  
右：本技術で生産された製品

静岡県農林技術研究所 茶業研究センター

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/orinjimusho/1046794/index.html>



※ 茶葉を半発酵することで、甘い花のような香りを引き出した茶

